

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12228

研究課題名（和文）ジョーリーとタブラーの比較からみる北インド古典音楽におけるリズム理論の変遷

研究課題名（英文）The Transformation of the Rhythm Theory in The Classical music of North India

研究代表者

井上 春緒（Inoue, Haruo）

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・特任研究員

研究者番号：80814376

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、理論研究と実践研究の両領域において成果を得ることができた。理論面では、当該研究の比較対象であるタブラーに関しての18世紀前後の音楽書を調査・研究することで、タブラーが楽器として北インドの宮廷に登場し始めた時代のリズム理論やレパートリーについて明らかにしたことである。一方、実践面においては、インド本国でもあまり奏者がいないジョーリーの奏法を、継続的なレッスンをすることである程度習得し、ジョーリーとタブラーの比較分析を行うことができた。これにより、ジョーリーとタブラーの比較から、18世紀移行のインド音楽におけるリズム理論の変容過程について明らかにすることに成功した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまで研究が遅れていたヒンドゥスターニー音楽のリズム理論ターラに焦点をあて、歴史の変容過程に理論と実践の両方面からアプローチし、その実態を明らかにしたことで、民族音楽学や当該地域の文化研究の領域において意義あるものであった。

そして、インドにおいてもほとんど奏者がいないジョーリーという楽器を習得し、研究、演奏活動を通して無形文化遺産の継承に貢献したことで、社会的意義があった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the process of transformation of rhythm theory in Hindustani music, the classical music of North India, by comparing two percussion instruments played in North India. The results of this study span both theoretical and practical research areas. On the theoretical side, the study of music books on tabla, the comparative subject of this research, from around the 18th century revealed the rhythmic theory and repertoire of the period when the tabla began to appear as a musical instrument at the courts of northern India. On the other hand, in terms of the practical research, I was able to learn some jorii playing techniques, of which there are not many players even in India, through continuous lessons, and was able to conduct a comparative analysis of jori and tabla. Through this comparison of jori and tabla, I succeeded in clarifying the process of transformation of rhythmic theory in Indian music during the 18th century.

研究分野：民族音楽学、地域研究（南アジア）

キーワード：ターラ ジョーリー タブラー 北インド ヒンドゥスターニー音楽 パキスタン 楽器からみる文化融合 音楽文化史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、北インドを代表する打楽器タブラーとパンジャブ州のシク教の宗派ナムダーリー・コミュニティーにおいて伝承されている打楽器ジョーリーの奏法やレパートリーを比較することで、18世紀以降の北インド音楽のリズム理論の変遷過程を明らかにすることである。初めに当該研究の意義について、研究開始当初の背景に基づいて詳説する。

報告者は、ヒンドゥスターニー音楽が、インド・イスラーム文化とよばれるペルシャとインドの文化融合の結果、成立したことを歴史的に実証する目的で、インド音楽について書かれた14世紀から18世紀のペルシャ語音楽書を研究対象としてきた¹。特にインドのリズム理論ターラに着目し、ペルシャ語音楽書の中でターラの記述内容がどのように変化し、現代のヒンドゥスターニー音楽のリズム理論の基礎を形成したのか分析した。その過程においてリズム理論は当然ながら楽器の奏法と深い関係にあるため、当時の楽器の融合や変容が、どのようにリズム理論に影響を与えたのか考察する必要があると認識するに至った。そこで、ヒンドゥスターニー音楽で演奏される代表的な打楽器タブラーとその成立過程において重要な影響を与えた打楽器ジョーリーを比較することで、18世紀当時のリズム理論の変容過程を明らかにする着想を得た。

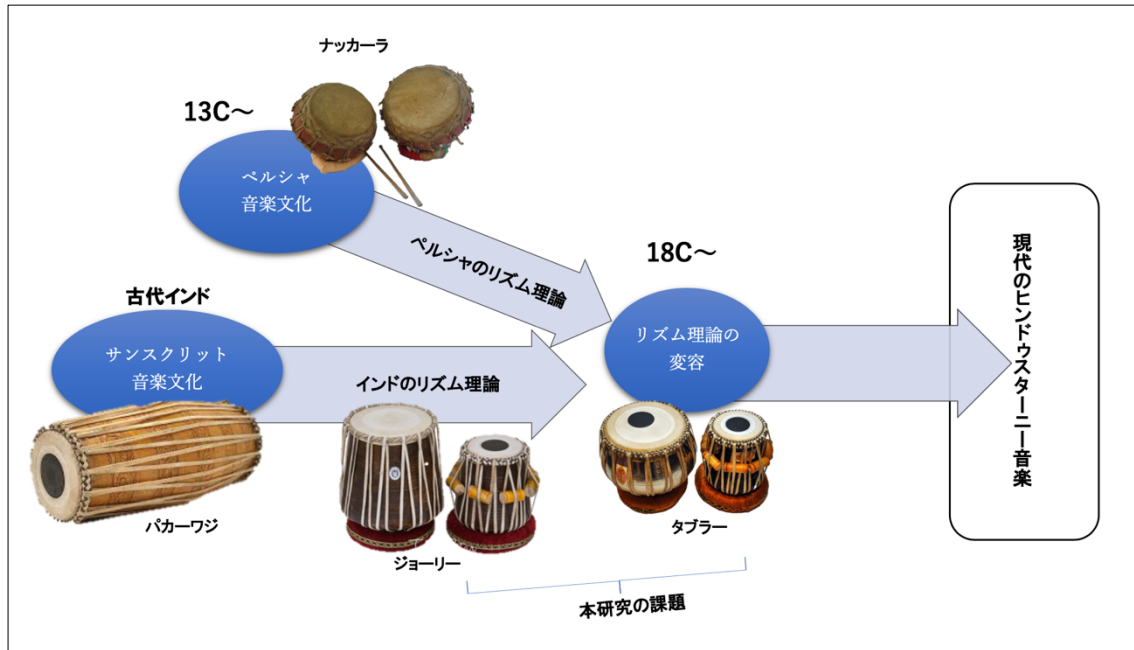
タブラーは、北インドやパキスタンやその他の南アジア地域において古典音楽、民謡、宗教音楽などさまざまな音楽ジャンルで演奏される打楽器である。一方、同じ打楽器であるジョーリーはインド国内においても、ほとんど知られていない。

先行研究では、インド起源の両面太鼓パカーワジと、アラブ・ペルシャ起源の撥で演奏する太鼓ナッカーラのそれぞれの特徴を融合することで、タブラーの奏法やレパートリーが形成されたと論じられてきた²。しかし、パカーワジやナッカーラとタブラーを比較した場合、その形態や奏法が大きく異なるがわかる。そのため報告者は、タブラーの発展段階において、なんらかの中間的な楽器があるのではないかと考えた。そして調査した結果、パンジャブ州のシク教徒ナムダーリー派に伝承されるジョーリーを発見するに至ったのである。ジョーリーとタブラーの比較は、これまで考えられてきたタブラーの形成過程における、楽器間の文化融合の歴史に、もう一つの視座を与えるものになる(次頁図1を参照)。抽象的になりがちなインドのリズム理論とペルシャのリズム理論の融合を、楽器という媒体を通して研究することによって、これまでには見えてこなかった文化融合の諸相を具現化することが可能になるのではないだろうか。このような問題提起に基づき、本研究は開始された。

¹ 拙著、京都大学提出博士論文『ヒンドゥスターニー音楽の成立—ペルシャ語音楽書からみる北インド音楽文化の変容』(2017)

² Rebecca Stewart. *The Tabla in Perspective*. PhD thesis (UCLA1974)

図1. 北インドにおける打楽器の融合



2. 研究の目的

これまでのインド音楽研究ではジョーリーについてはまったくと言って良いほど学術的研究がされてこなかった。本研究は、ジョーリーとタブラーのレパートリーを比較することで、これまで明らかにされてこなかったヒンドゥスターニー音楽のリズム理論ターラ理論の成立期における、当該音楽理論の変遷過程を具体化し、解明するための一つの指針を打ち出すことを射程にしている。さらにペルシャ語音楽書を含む複数言語の音楽書を参照し、実践研究で得られた分析結果と対照し、レパートリーの変遷を歴史的に跡付けることで、実践研究を主体とする民族音楽学の研究アプローチと文献学を軸におく文化史研究の融合を試みる。本研究が完成した暁には、南アジアの古典音楽であるヒンドゥスターニー音楽に対する人々のより深い理解を喚起するばかりでなく、西洋音楽に偏重している日本人の音楽関心を、同胞アジア諸国の音楽文化へと方向づけることになる。

3. 研究の方法

本研究は、18世紀以降における北インド音楽のリズム理論の変容過程について、文献研究と民族音楽学の実践研究を統合した手法によって明らかにする。ここでは、本研究の研究方法を、1) 楽器の習得、2) 文献研究、3) 比較分析及び研究成果の発信という3つの観点に沿って、説明する。

1) 楽器の習得と比較

ジョーリーのレパートリーや奏法を、インド人の師匠に師事し、徹底的に学び、その特徴を分析する。その上でタブラーのレパートリーや奏法と比較し、リズム理論の違いを明らかにする。具体的にはジョーリーを定期的に師匠に習う。報告者は2017年からギャーン・シン氏というインド北西部ルディアナーにジョーリー奏者に師事し、オンライン・レッスンを受けていたため、そのまま週一回のレッスンを継続した。

又、2018年8月10日から18日にかけて、ギャーン氏が住むナムダーリーの総本山、シュリー・バーイーニー・サーヒブにてフィールド調査を行った。具体的な調査目的はジョーリーの伝承状況の確認、演奏の録音・録画、ジョーリーの演奏法の習得であった。

2) 文献研究

文献研究に関しては、タブラーとジョーリーに関する音楽文献を収集し、記述内容を読解し当該楽器の歴史的変容過程を跡付けることを目論んだ。特にペルシャ語やウルドゥー語でかかれた音楽書の写本は、いまだ研究の蓄積がない部分であるため、重点的に調査する必要がある。又、ジョーリーに関して書かれた書物は、その所在すらもわからない状態であるため、一から調査する必要があった。

3) 比較分析及び研究成果の発信

ジョーリーとタブラーの演奏を比較分析するためには、それぞれのレパートリーをある一定程度、習得する必要がある。報告者はタブラーに関しては、既に10年間以上インド人の師匠から教えを受けているため、比較する上で十分なレパートリーを習得していた。そこで今回は特にジョーリーのレパートリーの習得に時間をかけた。

ヒンドゥスターニー音楽では打楽器奏者は、リズムをキープすることに主眼をおく伴奏か、より高度な演奏を行うソロ演奏がある。本研究ではソロ演奏に着目して、当該楽器のそれぞれの奏法とレパートリーの比較をおこなった。

4. 研究成果

本研究の研究成果を上記の研究方法の3項目に対して、それぞれの個別に以下に記述する。

1) 楽器の習得と比較

ジョーリーはタブラーよりも大きく、一オクターブほど低音が出る楽器としての特徴を持っている。又、大型の低音太鼓ダーマーの膜面には演奏するたびに、全粒粉を捏ねたペーストを塗って、低音が出るように調節しなくてはならない。

一方、タブラーにはあらかじめスィヤーヒーという鉄粉などを混ぜたペーストが塗られ、乾燥されているため、その上を手首で擦り、音程を変えるような奏法が発達した。このような奏法の違いは、一見些細なことのように見えるが、実際に演奏してみると音楽表現に大きな違いを生むことがわかった。つまり、タブラーは低音をコントロールしやすいために、細かいフレーズのニュアンスを作りやすい。一方、ジョーリーの低音は開放音であり、より広がりをもった深い音響効果を作りだすことができる。ジョーリーには、このような低音を多用する、ターデー・ボールと呼ばれるゆっくりとしたレパートリーがある。このことから打楽器の音質が、演奏されるテンポに大きく影響している可能性があることがわかった。そのため、18世紀にヒンドゥスターニー音楽の基礎が形成される際に、演奏されるリズムのテンポが速くなったのかもしれないと想起される。もちろん当時の演奏を聴くことができないため、これは憶測の域をでないが、楽器の奏法がターラ理論に与える影響を考えるには、演奏することでうまれてくる憶測を重要視しなくてはならない。今回の研究では、そのような奏者としての感覚的な部分での問題意識が多くうまれたことは、成果の一つであった。

それでは以下に、今回の研究によってわかったタブラーのソロとジョーリーのソロ演奏のレパートリーをそれぞれ表す(表1 タブラーのソロ演奏のレパートリー、表2 ジョーリーのソロ演奏のレパートリー)。表1と2に掲載したレパートリーは、パンジャブ流の奏者ギャーン氏から聴取したものであり、これがインド古典音楽における一般的なジョーリー及びタブラーのソロ演奏におけるレパートリーであるのかについては今後、より広範

な調査が必要となるだろう。しかし、現時点での研究成果として、このようなレパートリーがあることを報告しておきたい。

表1 タブラーのソロ演奏のレパートリー

タブラーのソロ演奏のレパートリー
1. mukhra, mohra, uthan tihai
2. peshkar elaboration
3. kayda barabar ki laya, & other laya (layakari)
4. gat kayda
5. chala, chalan, rau rela (angustana), baant, farshbandi tihaiyan
6. anagat & atit concept
8. gopucha yati, piplika yati, mrdanga yati
9. bandish (tukra, gat, paran, farmaisi, kamali nauhaka, ckardar, chakar dar gat, dopali, tripali, choupali, toda, pamelu, baraiyaan ke bol etc)
10. laggi, larant and lari (can be played before the bandish)
11. swar jawab, salami paran classical kathak
12. jugalbandi Padant is mandatory for some of the bandish & another bols

表2 ジョーリーのソロ演奏のレパートリー

ジョーリーのソロ演奏のレパートリー
1. uthan Paran - laykari of thekha – improvisation of mohara
2. tha de bol - ek arse de bol - do arse de bol
3. sheran concept tihai and paran rachna
4. dugun de bol tihai and paran rachna
5. pakki dugun de bol
6. barat, prastar, vistaar, chalan, chala, shand rela with different layalari
7. layakari de bol – aar di laya, ti gun di laya kari, chou gun di laya, koad di laya, beaad di laya
8. improvisation of shand ang tihaiyan & rachna
9. chowkri, shikdi
10. rela tipalli, choupalli, do mohim gat
11. ek ashri shand , singha avlokian shand chachar shand, madhubar shand inspired by Gurubani (religious Guru Grant Sahib, Dasm grant)
12. nauhaka – kamali chakardar - farmaishi- chackardar
13. sututi (can be played in the beginnig in the middle)

2) 文献研究

文献研究に関しては、進展と停顿があった。タブラーについての音楽書としては、ペルシャ語音楽書『タブラーの規則についての論文 *Risāla-yi Qava‘ed-i Tablā*』(1780) とウルドゥー語音楽書、『タブラーの奏法についての論文 *Risāla-yi Tablā Nāwāzī*』(1906) を入手し、その読解を行った³。18世紀以降のタブラーのリズム理論に関しての、音楽書の記述は、想像以上に複雑であり、現在のヒンドゥスターニー音楽の理論とも大きく異なるものであった。これらの文献の比較研究の結果に関しては、現在論文を執筆中である。

一方で、ジョーリーに関して書かれた音楽書は、入手するどころか、その存在を確認できていない。この楽器がスィク教徒によって継承されていることから、おそらくパンジャープ語で書かれた写本を調査する必要があるが、報告者は未だパンジャープ語を自由に扱うことができない。今後、ジョーリーに関して書かれたパンジャープ語音楽書があるのか、調査するとともに、必要であれば当該言語の基本的な文法や語彙を学習する。

3) 比較分析及び研究成果の発信

本研究期間中、ジョーリーとタブラーの比較分析に基づく研究発表を行った。その中でも、2021年10月31日に東洋音楽学会第72回大会における「パンジャープ・ガラーナーとジョーリーからみる北インドの打楽器の歴史」と、2023年5月14日にキングス・カレッジ・ロンドンで開催された12th Annual KCL-UNC Graduate Student Music Conferenceにおけるデモンストラーション研究発表“Comparative Study of The Indian Drum Repertoires Played with Tabla and Jori”は、重要な意味をもつものである。前者の発表ではジョーリーの奏法が、両手で一つの太鼓を叩くタブラーにはない奏法について、フロアから興味深い意見をいただいたこと、後者の発表ではパキスタン人の音楽家兼研究者から重要なスィク教徒インフォーマントを紹介していただいた。このような研究発表をすることで、フィードバックをもらい研究が深まっていくことは、大変重要であり、本研究のあらたな展開につながるものである。

最後に本研究を遂行するにあたり、大変お世話になった京都大学の関係者及び日本学術振興会各位に謝意を表したい。

³当該音楽書に関しては、日本学術振興会海外特別研究員としてキングス・カレッジ・ロンドンにて研究を行う機会を得たことで写本を入手することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Haruo, INOUE	4. 巻 16
2. 論文標題 A Comparative Study of Persian and Indian Rhythm Theory: Based on the Tarana-yi Surur - an 18th Century Kashmiri Manuscript	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『イスラーム世界研究』京都大学イスラーム地域研究センター（KIAS）	6. 最初と最後の頁 21-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Haruo, Inoue	4. 巻 65
2. 論文標題 Book Review: Richard K. Wolf. Voice in the Drum: Music, Language, and Emotion in Islamicate South Asia	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Ethnomusicology	6. 最初と最後の頁 627-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上春緒	4. 巻 18
2. 論文標題 「18世紀の北インドとペルシャ音楽の文化融合：『タラーナ・イエ・スルール』にみるリズム理論」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『リズム研究』	6. 最初と最後の頁 5-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上春緒	4. 巻 35
2. 論文標題 「タブラーの習得過程における記譜法の意義」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『関西楽理研究』	6. 最初と最後の頁 77-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 INOUE, Haruo
2. 発表標題 “Comparative Study of The Indian Drum Repertoires Played with Tabla and Jori”
3. 学会等名 12th Annual KCL-UNC Graduate Student Music Conference
4. 発表年 2023年～2024年

1. 発表者名 井上春緒
2. 発表標題 国境を超えて繋がる南アジアのインディペンデント音楽
3. 学会等名 フィールドネットラウンジ「躍動する南アジアのポピュラー音楽文化の諸相」
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 井上春緒
2. 発表標題 「『タブラー理論体系書』からみる18世紀のインドの打楽器演奏法」
3. 学会等名 東洋音楽学会第73回大会
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 INOUE, Haruo
2. 発表標題 “The Musical Interaction in the 18th Century Kashmir described in Taran-yi Sorur”
3. 学会等名 京都大学イスラーム地域研究センター国際ワークショップ
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 井上春緒
2. 発表標題 「南アジアの太鼓文化 タブラーとジョーリーにみる奏法と太鼓ことばの関係」
3. 学会等名 民族藝術学会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 井上春緒
2. 発表標題 「パンジャブ・ガラナーとジョーリー からみる北インドの打楽器の歴史」
3. 学会等名 東洋音楽学会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 井上春緒
2. 発表標題 「Qalbaana」
3. 学会等名 日本音楽即興学会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 井上春緒
2. 発表標題 「南アジアの太鼓文化 タブラーとジョーリーにみる奏法と太鼓ことばの関係」
3. 学会等名 民族藝術学会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 INOUE, Haruo
2. 発表標題 “ Descriptions of the Court Music in the Ain-i Akbari in terms of the Cultural Interaction between the Persia and the Indian music ”
3. 学会等名 The 6th Perso-Indica Conference
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 井上春緒
2. 発表標題 「タブラーとジョーリーのレパトリーの比較考察」
3. 学会等名 東洋音楽学会
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 「サントゥールにみるペルシャ音楽とインド音楽の文化融合の諸相」
2. 発表標題 東洋音楽学会第282回定例研究会
3. 学会等名 井上春緒
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 井上春緒
2. 発表標題 「タブラーの習得過程におけるわざ言語の可能性」
3. 学会等名 関西楽理研究会第 174 回例会
4. 発表年 2018年～2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------